

少年合唱における変声に関する一考察：我が国とドイツの事例を通して

井上, 博子

小田原短期大学保育学科通信教育課程音楽教育学：特任教授

<https://doi.org/10.15017/2229997>

出版情報：総合文化学論輯. 8, pp.17-33, 2018-05-01. 総合文化学研究所
バージョン：
権利関係：



少年合唱における変声に関する一考察

—我が国とドイツの事例を通して—

井上 博子

1. はじめに

本研究は、我が国における変声期研究の歴史を概観すると共に、我が国では明治期以来音楽教育の範をドイツに求めてきた歴史的背景からドイツの少年合唱団における事例を参照、比較考察を行い、少年合唱に関する基礎資料を拡大することを目的とするものである。

1955年、ウィーン少年合唱団が初来日し、その声に魅せられ「我が国にも少年合唱団を」という願いから全国に数多くの少年合唱団が創立された。だが、半世紀を経た現在、活動を続けている少年合唱団は10団体に満たない。¹⁾ 減少の理由は、活動休止、解散、少年少女合唱団への移行などによるものである。少年合唱団の運営が難しく、長続きしない理由の一つに変声がある。ウィーン少年合唱団が各地で人気を得ている理由は、制服の可愛らしさや毎年取り上げる日本の歌などの幅広いレパートリーは勿論であるが、魅力は何と言ってもその歌声である。「少年合唱²⁾が持つ特別な響き」、「少年にしか出せない力強い声質」といった言葉で表現され、少年合唱に関わる人々の多くが、「少年の声には説明しがたい魅力がある」と口にする。だが、この説明しがたい魅力を持つボーイソプラノは、変声によって失われる。合唱に親しみ、練習と経験を積んで上達した頃変声を迎え、それまでの音域では歌うことができなくなる。少年合唱における変声は、運営面においても音楽面においても避けて通ることのできない大きな課題の一つである。

ウィーン少年合唱団は、オーストリア・ハプスブルク家の聖歌隊であるが、欧州では数多くの少年合唱団が活動をしている。言うまでもなくドイツにも教会の聖歌隊を起原とする少年合唱団が多数存在する。遡ればルターやバッハは少年時代、聖歌隊の一員として歌っていた。ドイツには長い歴史を持つ少年合唱団が数多く、また歴史は浅いが実績を上げている合唱団も存在し、教会での礼拝音楽や芸術的音楽活動に携わっている。そのような少年合唱団にとって団員の変声は、直面し続けてきた課題である。国は違っても共通する課題であることは容易に推察することができる。

少年が合唱に関わる場としては、少年合唱団だけではなく、学校教育における教科教育としての音楽科授業や合唱クラブなどの活動がある。いずれの場においても指導者は日々その対応に当たっている。そのため変声や変声期に関する研究は、発声法や声域、歌唱指導法、音声学や医学、教材開発や心理的課題など多様な視点から多数なされている。これ

らの研究は、いずれも示唆に富むものであり、変声が男子児童・生徒の歌唱活動において大きな課題であるということを知ることができる。我が国の変声・変声期にかかわる先行研究は数多く、可能な限り参照させていただいた。だが、その中にドイツの事例を認めることはなく、ドイツの事例に言及することは意義があると考え。変声に対する対応は、時代によってどのように変わったのか、また我が国とドイツでは、どのように共通するのか。または、異なるのか。これら限りない課題の一端を、変声の捉え方とその対応という視点から明らかにしたい。

変声は男子児童・生徒のみの問題ではなく、女子児童・生徒にも成長と共に訪れるものではあるが、本稿においてはドイツの少年合唱団を事例としていることもあり、少年の変声・変声期を対象として検証している。なお、本稿で用いる文献の引用にあたっては旧漢字を常用漢字に改めている。また独語文献の日本語訳は筆者による。

2. 我が国の変声期研究

2.1 「歌わせない」時代

我が国における変声期研究が、いつから始まったのか明確に述べることはできないが、L. W. Mason 著、内田彌一訳『音楽指南』（1884）には発声指導法が提示されている。この当時の児童発声研究と共に始まったのではないかと推測される。

1902（明治 35）年に制定された「中学校教授要目」における「唱歌」の「教授上ノ注意」には、「生徒中声嘶、咳漱等ノ疾患アル者及変声期ニ際セル者ニハ便宜上唱歌ヲ免除すへし」（教育史編纂会、1938, p.265）とある。声や喉に疾患がある者に並んで変声期中の男子は唱歌を免除すべきであるとされていた。この考え方は 1911（明治 44）年の施行規則改正の際にも「生徒中変声期ニ際セル者ニハ唱歌セシメサルコトヲ得」として引き継がれている。（教育史編纂会、1939, p.212）

同 1911（明治 44）年には『ジーベル唱歌法』³⁾が、東京音楽学校學友會譯によって出版された。1930 年に乙骨三郎によって改訳され、変声について次のように記述されている。

凡て変声の間は決して歌ってはいけない。児童の音声と健康とを注意する両親は、児童に声変わりの徴候が見え始めたならば直ちに唱歌の実習を禁じなければならぬ。

然らば変声の生じた事を知らせる徴候は如何というに、屢々声が嘎れ、声が粗くなり唱歌の際に疲れ易くなる。前には容易に出し得た高い音が屢々出なくなる。或いは無理に出そうとすると全く割れてしまう。音を出そうとする努力が若い歌手の顔つき

に現れる。即ち頸の筋肉の緊張、眉のつり上がること、顔色の変化などで、よく注意するものにはすぐ分る。こんな徴候が見えて変声期の近づいた事が分ったならば児童を唱歌教授から除くこと一少く共聴させるだけにして一所に歌わせないこと一は殊に学校の先生の義務であろう。(ジーベル 1911, pp.14-15)

ここでは、「変声の徴候が少しでも現れたら直ちに歌うことをやめさせなければならぬ」と、厳しく戒めている。この当時は、「変声中は歌わせない」という主張が主流であった。

草川宣雄(1923)は、変声期を「人生の危機」(p.68)と記述し、「欧米諸国の有名な人達の考えを見ると、変声期には唱歌をさせない様にせよと云う意見が多い。変声期には唱歌はしないが器楽の練習をさせる」(p.79)と述べている。

福井直秋は、1924年に学校唱歌を対象とした『唱歌の歌い方と教え方』を発刊した。⁴⁾ はしがきに「本書は欧州の声音学者声楽者及び唱歌教師の理論学説を経とし、予の研究経験を緯とし、加うるに我が国の唱歌並びに唱歌教授の実際に鑑み、努めて的確簡明に叙述せんことを期したものである」(p. 1)とあり、欧州の理論を前提としていることが窺える。変声についての記述は以下である。

この時期にある子女の教育には格別な注意を払い、唱歌教授に際しても一段の思慮をめぐらすことが大切である。声音学者や唱歌者の多くの意見は変声期の間歌わせないよとということに一致している。声音機官に変徴を生じているのだから、その期間その機官を使用しないというのは当然すぎる当然で、議論の余地がない。完全にその期間をすぎるまで歌うことを禁すべきであることは病中安静加療を要するのと選ぶ所はない。これについて一つの問題となるのは或る相当の期間児童に唱歌せしめないといふことは彼らの音楽趣味の向上発達を阻害するであろうということである。勿論声音機官に不可避的の生涯を生じたのであるから、それは己むを得ないことではあるが、併し児童の音楽趣味の向上発達は彼等自身をして自ら歌わせることのみによって為し得るものとは限らない。同級児童の唱歌を傾聴させることとか、教師の範唱や演奏を賞翫させることなどによっても大に養われるものである。それゆえ教師の思慮深い指導があるならば或る期間歌うことを休止したととも音楽的の学習を全然廃したようなこととはならないと思う。(福井 1927, pp.116-118)

ここでは、変声を病気と同種に捉え、決して歌わせることなく、傾聴や賞翫によって音楽性の向上を求め、それもまた音楽学習の一環であるとしている。草川と同様、「変声期間中は歌わせない」という主張である。福井は、長年に亘る音楽を通した日独両国の親善友好への貢献に対して1937年にドイツ政府より赤十字名脊章を贈られている。また翌1938

年に、文部省より作曲および音楽理論についてドイツへの在外研究員を命じられている。『ジーベル唱歌法』にも見られる、同時代のドイツの指導法が取り入れられていることが明らかである。

だが、井上武士は 1949 年に『音楽教育精義』において「変声期中は理想からいえば絶対に歌わせないのがよいのであるけれども、実際問題として全然歌わせないということは困難である」(p.383) と述べ、変声期児童・生徒の取り扱いについての重要点を次のように提示している。

- (1) 長い時間続けて歌わせないこと。実際上の取扱いとしては少しずつ交代に歌わせるような方法をとるのである。
- (2) あまり強い声を出させないようにすること。
- (3) 特に声域中の高い部分の音が続くような教材は避けること。
- (4) 変声期を過ぎれば 1 オクターブ下がるが、変声期中の児童生徒は小字ト音から 1 点口音位迄の声域である。特に変声期中の児童・生徒に歌わせる必要があれば、この音域内に移調して歌唱させる。(p.383)

教育現場においては同年齢の生徒が一つのクラスの中に存在し、男子生徒には順次変声が訪れる。それぞれの段階の変声期中の男子生徒が混在する中で、「変声期中は歌わせない」というのは難しい。変声期中の男子児童・生徒に対しても歌わせざるを得ない状況が浮かび上がってくる。

2.2 男子発声指導の推進

男子児童・生徒の変声が合唱活動の中で問題とされるようになった背景には、音楽の世界から遠いところにいた男子児童・生徒が学校教育の中で歌わざるを得なくなったことがある。「有髪男子のなす業に非ず」⁹⁾とされ、男子生徒と女子生徒の音楽教育において、その内容や実施状況に大きな差があった時代から、変声・変声期への対応が求められる時代へと移っていった。ここでは、男子児童・生徒への発声指導がどのようにして推進されてきたかを探る。

2.2.1 仙台市立南材木町小学校の実践

1952 年から 1954 年までの 3 カ年間、文部省は初等教育音楽科実験学校として仙台市立南材木町小学校を指定した。この研究は、児童発声の実験的研究をもとにして、小学校に

おける音楽科の指導を、より効果的にすることを狙ったものであった。その研究成果をまとめたものが《初等教育研究資料第XIV集『頭声発声指導の研究』音楽科実験学校の研究報告（2）（昭和31年7月20日初版発行文部省）》である。それには「10. 男児発声の指導」として、男児一般に対する指導上の留意点を、

（1）男児の歌唱に対する劣等感を排除する。

（2）日常の言語生活の指導をする。

の2点とし、研究結果を次のように記述している。

頭声の段階に到達した男児発声に耳を傾けて検討するならば、その音色、その音量、その共鳴、その声域、いずれの点からしても、女児のそれに勝るとも劣らないものであることを認めなければならない。むしろ、その清澄な音色と明るく力強い響きとは、女児では得られない男児発声の優位性を示している。

変声期以前の男女児の扱いは、もともと区別されるものであってはならない。入門期から女児の特質を明確につかんで、無用の先入観を捨てて指導に当るならば、男児の指導にからむこの種の困難はやがて解消し、ことさらに男児発声の指導を取り上げる必要もなくなるであろう。そして、男女児おのおの持つ特色が美しく発揮され、歌唱の指導に新しい世界が開けてくることが確信される。我々の実験と結果が、そのことを明確に証拠立てている。（文部省、1956. pp.153-154）

合唱などの音楽活動は女子のものであり、男子が好むものではないという考え方に一石を投じたこの見解は、次に紹介する品川三郎の実践と共通する。変声や変声期については、小学校の段階ではまだそれほど問題となっていなかったことが窺える。

2.2.2 品川三郎と「みのお少年合唱団」

品川三郎は、大阪府池田師範で教鞭をとっていたが、日本の児童発声がふるわないことを嘆き、小学校の現場に身を転じて、ボーイソプラノの研究と指導を熱心に行った。正しい声の出し方を教えたら、男子は女子に負けないばかりか、女子以上に美しい声が出せること、またその音楽性は、女子よりも遥かに高いものであると考え、それを立証したのが「みのお少年合唱隊」であった。活動は10年余りで途切れるが、その研究成果は著書『児童発声』（1955）に詳しく述べられている。

変声についての記述が認められないのは、当時は、男子児童変声の時期が現在よりは遅く、小学校では、あまり大きな問題ではなかったのではないかと思われる。品川は合唱における男子の音楽性の高さは女子児童に勝るとも劣らないということを提示した。変声は

男子児童が歌うことを好まなくなる理由の一つとしてあげられることが多いが、岩崎（2008）は「男子が歌を歌わない事への改善を発声指導に求めた」（p1.）として、品川の実践を評価している。

2.2.3 鎌田典三郎と西六郷少年合唱団

1955年に初来日したウィーン少年合唱団の歌声を聴いた鎌田は、次のように述べている。

昭和 30 年、いいきっかけだったんですね。それを聴きに行きましてね。ボーイソプラノを、初めてなまで聴きました。ああいう声は男でしか出ないんだな、と思って、やろう！と決心したんです。僕は極端なんです。『女の子は休み！』にしましてね。『男だけ、希望者は集まれ！』ということで始めたんですよ。

それで3年…。最初はソルフェージュから始めた、女の子のときは、ただ歌わせてたんですが…。ウィーンを聴いて、古典的な音楽性を感じさせられてたものですから。若気の至りで、すぐそこに頭がいつちゃって…。ソルフェージュをやって、発声をして、と思ってね。コール・ユーブングエンを買って始めたんですよ。そうしたら男の子たち嫌がっちゃって…。だんだん集まらなくなって頭にきて土手に探しにいくとね、野球してたり、魚釣してるのよね、そこで『やる！と言ったじゃないか！男の約束だろ…。』と連れて帰ったりして…。(鎌田,1983. p.260)

このようにして始まった少年合唱であった。鎌田は、変声期の実態を次のように述べる。

誰もが通る声にとっての苦難の道である、(特に男子にとっては)最近では世界的に変声期が早くなって来たと言われている。ひと昔は、小学生で変声の始まった子は少数であったが、今では、6年の男子では半数が変声に入っている。(p.70)

また、〈変声に対する指導者の心得〉(変声期の指導)として、次のように記述している。

〈変声に対する指導者の心得〉

こわれものを扱うように大事にすべきだから、歌わせない方がよいと云う消極派(医者に多い)と、正しい発声法のもとに指導すれば、歌わせても良いと云う積極派(音楽教師に多い)とがいる。どちらの説が正しいか?要は個人差があるので固定する考え方は無理で、あくまでもケースバイケースである。指導者として大事な事は、変声期に入ったために、声がよく出なくなりそのため音楽嫌いな子どもにならない様

配慮すべきである。(p.70)

〈変声期の指導〉

- ・充血している声帯に、強い刺激を与えないために、日常会話でも必要以上な大声を出さない様に（生活指導）指導する。
- ・変声期についての知識理解を持たせる。『大人になるために誰もが経験する大事な体験である』と云う事について話し合い、心理的に安定感を持たせる。
- ・小学生の場合は、変声前期とも云える大事な時期なので、「話し声（低い地声）変声期の子供とくらべると、オクターブ低い声」で歌う事は、声帯に負担をかける事になるので、できればファルセット（裏声的）な発声で軽く歌わせる。
- ・地声は声帯のほとんど全体を振動させるが、ファルセットは声帯の一部分の振動であるので刺激が少ない。（鎌田 1983. p.71）

以上の少年合唱団の活動を基盤とした具体的提言は、既に、「歌わせる」ことが前提となっている。次項では「歌わせる」方向へすすんできた諸説を整理する。

2.3 「歌わせる」方向へ

上述のような経緯を辿り、1950年代からは変声中に歌わせるための研究が行われるようになってきた。高山清司（1958）は「変声中の生徒に歌唱させることについては、従来いろいろと論議されてきた。歌唱に反対する人もあれば、可とする人もあり、その論拠もいろいろであるが、現在は特別な配慮のもとに、無理をしない程度に歌唱させたほうがよいという傾向がとくに現場の教師の間に強い」（p.41）と述べている。高山は中学校の音楽教師としての立場から、「適切な方式で、なんらかの形で歌唱学習に参加させることの方が遙かに賢明である。まして、学級全体に対して歌唱学習を中止するなどは想いもおよばない」（p.42）と述べている。

藪田恵一郎（1961）は、変声期間中の歌唱指導の留意点を3点あげている。「①無理のない発声をする。ボリュームも声域も、その可能な範囲のもとで発声が為されなければならない。②常に正確な発声方法をとらなければならない。③発声についてあまり敏感にならないこと」（p.105）として正しい発声法のもと神経質にならず無理のない発声で歌うという方向を示している。

山口薫（1967）もまた「歌わせないのが望ましいといっても、学級を扱う上で、それぞれ一定しない変声期間の生徒に歌わせないで過すことは不可能でありますし、またその必要はないでしょう。すなわち、正しい歌い方で積み上げられているとみなせば、無理のな

い発声をしている筈でありますから、生徒の状態をよく観察し、教科書から1、2度下げた曲を歌わせます」(p.63)としている。

森恭子と関綾子(2002)は、「教育現場において、児童生徒の変声が低年齢化してきているのではないか」という仮説のもとに熊本県内の小・中学生を対象として実態調査を行い、小学校の児童の約30%が変声を迎えることを明らかにし、変声期の早期化を実証した。

竹内秀男(2009)は、次のように記述している。

私たちは、「変声期」に対して特別な感情を抱いてしまいがちです。しかし、教師が変声期を意識しすぎて、声帯を守ろうとするあまり子どもを歌唱から遠ざけ、あるいは自ら合唱指導からとおざかってしまうようでは、音楽科の目標を果たすことはできません。

変声期を乗り越えるためには、声を保護することも大切ですが、消極的でもいけません。変声初期・中期・後期というように、その日、その時、その段階に応じたケースバイケースの指導法が望まれます。(竹内, 2009, p.10)

竹内は本書において変声期と合唱指導に関する実践を中心に紹介している。⁶⁾ また変声の段階を「初期」「中期」「後期」として、変化の様子を分析し、表にして、それぞれの時期に応じた適切な指導法が必要であると記述している。

高橋雅子は、2011年以降、Cambiata Conceptを適用した変声期男子の具体的指導方法についての論文を継続的に発表している。我が国の変声期男子に対する指導法と共に、教材開発の必要性を提示しており、多くの示唆を含むものである。

以上、変声と変声期の捉え方について年代を追って概観した。我が国における変声期研究は、百年余の間に、「歌わせない」から「歌わせる」へと移行してきた。その間には、「歌わせないわけにはいかない」「歌わせざるを得ない」という論議や葛藤があったであろうことは想像に難くない。そして現在、指導法の中心は「変声期間中に適した教材の開発」へと進んでいると言えよう。

3. ドイツの事例

3.1 ベルリン大聖堂少年聖歌隊

それでは、ドイツの少年合唱における変声・変声期の取り組みはどのようなものか、本項では、ベルリン大聖堂少年聖歌隊における事例を検討する。⁷⁾

ベルリン大聖堂 **Berliner Dom** は、ベルリン・ミッテ地区にあるホーエンツォレルン王家の記念教会である。大聖堂の歴史は 1415 年から始まる。1465 年に大聖堂聖歌隊の基礎が築かれ、大聖堂の礼拝音楽を受け持ってきた。1923 年にベルリン国立大聖堂聖歌隊という称号を得たが、第 2 次世界大戦中 1944 年に大聖堂の大部分が破壊され、聖歌隊の活動は休止となった。1990 年に東西ドイツが再統一された時にはベルリン大聖堂聖歌隊創立 525 年の祝祭が行われた。大聖堂は 1993 年に修復され現在の姿を取り戻した。2002 年にカイ=ウーヴェ・イルカ Kai-Uwe Jirka (1968~) が、大聖堂聖歌隊隊長として就任し、現在に至る。

ベルリン大聖堂少年聖歌隊は、団員数 300 名を擁する大規模合唱団である。聖歌隊の練習は週 3 回、年齢別のグループで行われる。練習場所、練習時間、担当指導者は、それぞれ異なる。練習時間は発達段階に応じて、5 歳児のクラスが 45 分間、ミドルクラスが 60 分間、コンサート合唱団は 90 分間などに設定されている。総監督イルカのもと、指導者陣は、ベルリン大聖堂聖歌隊としての高度な水準を求めて低年齢のクラスからコンサート合唱団まで、一貫した練習や活動を行っている。変声を迎えた隊員は、**adult** として **Vocis** のグループに加わり、変声期間中はあまり歌わせず、理論の勉強をする。以下グループ別の活動内容を紹介する。

【DoMinis】ドミニス（5 歳から）

音楽の早期指導はすでにもう就学前の年齢に始まると考えられ、このグループでは、音や音色、響きやリズムに、遊びを通して親しむ。ドミニスの活動は週に 1 度である。レッスンでは個性が重要視され、歌うことの楽しさと喜びが伝えられる。立つこと、座ること、正しい呼吸法が手ほどきされ、音名、そのピアノ上のポジション、楽譜の記し方などの初歩の音楽理論を学ぶ。

【Vorschule】フォアシューレ（6, 7 歳から）

【ドミニス】に続くグループで、活動は週に 3 度行われる。声とリズム感覚が育成され、音楽理論の基礎が伝達される。遊びを通して楽しみながら楽譜をみて歌うことを習得する。少年たちは、通常、約 1 年半後にクレンデへ進級する。

【Kurrende】クレンデ（8 歳から）

このグループでは、自分自身の音域を知り、ソプラノとアルトに分かれ、多声で歌うことを学ぶ。自分自身の声と、他のグループの声を同時に聴くことを練習する。公共の場で行われる演奏活動に初めて出演することができる。

【Vorchor】フォアコア（8 歳から）

フォアシューレとクレンデの養成段階を修了した後で少年たちはフォアコアに進み、変声終了後の若い男声と共に初めて歌うことになる。ここでは全ての聖歌隊員に対して音楽的要求が高くなる。作品は複雑になり、単声または簡単な多声音楽から 4 声から 8 声の作

品の習得へとすすむ。少年の声と男声は、ヴォイストレーナーによって、定期的・専門的に指導される。隊員はそれぞれ一定の水準に到達した後、【ハオプトコア】への移行が可能になる。

【Hauptchor】ハオプトコア（9歳から）

約30人の少年たちと20人の男声によって構成されている。練習は週3回、2時間に拡大される。少年たちは、このグループで変声を迎えるまで歌う。大聖堂の礼拝音楽を構成するという責任を持ち、国内外の演奏旅行が許され、音楽的業績が最も高いグループである。ハオプトコアでは、定期的に個別の声の育成を受ける。礼拝音楽のほか、ベルリン・フィルやドイツ交響楽団と共演など、ベルリンの芸術音楽の領域における演奏活動をも携わる。公式の祝祭や記念行事にも招待され、何人かの少年たちはウンターリンデン州立歌劇場、ドイツオペラ劇場などにもソリストとしてオペラの舞台に出演する。

このようにして年齢に応じた、一貫した声の育成が行われている。注目に値するのは、変声前の【少年たちの声の育成】、変声中の【未来の声】、変声後の【男声の声の育成】という、変声の段階に応じたグループ別の活動内容である。各グループにおける声の育成法を紹介する。

【少年たちの声の育成】

5歳から変声を迎えるまでの少年の声の育成は、部分的にはグループでも行われるが、単独の訓練を主としている。少年たちは個々の課題に従って、平均して15分から20分、姿勢、呼吸の仕方、共鳴の見つけ方、イントネーション、音色の形成などが指導される。目的は合唱に携わっている間、声を健康に保つこと、大聖堂聖歌隊の響きに相応しい声を苦労せずに出せるようにすることである。

その中でも、ベルリンの音楽生活における音楽的な催し、例えばベルリンオペラハウスでのソリストの仕事を引き受けるのに相応しいと判断された少年たちには更に特別の指導がなされる。変声期への過渡期にゆっくりと成長する男声は、自然に、そして健康に発達することに注意が向けられる、その結果、若者たちには声に関する全ての可能性がもたらされ、場合によっては、プロの歌手になる道もまた開かれている。少年たちの次第に成長する声は不定期に検査され、新たに訪れる男声を迎えるための助言をもらう。

【未来の声】

このグループでは、変声期間中の少年たちへ対応がなされる。変声期間中、少年たちは理論的な知識を得るための時間を増やし、声は用心深く育成される。理論的知識の内容は、音楽史や楽曲様式、その様式による作品、楽節と聴覚の育成、スコアと楽器の知識などである。異なった時代の作品を聴いたり、傑作と呼ばれる作品のテーマを書き留めたり、書き留めたリズムを叩いたり、時には、ハオプトコアが、演奏したハイドンのミサを和声的

に解析したりする。大聖堂聖歌隊の少年たちは、変声期間中強制的な休みへ送り込まれることはなく、後にフォアコアで、そしてその後はハオプトコアで「男声」として歌うために、Voces In Spe（未来の声）で活動している。

【男声の声の育成】

変声後の「男声」が自分の声を再び見つけるのに苦勞をするということは屢々問題となる。ゼロから始めなければならないという感覚に陥り、少年のときにできていたことが全て奪われたように感じる。変声直後の若い男声は、新しい声域で自分の正しい居場所を見つけなければならない、変声前にソプラノ、またはアルトとして以前歌っていた音楽作品において、今度はテノールかバスで歌うことになる。つまり、以前歌っていたパートを聴き、合わせながら歌うことになる。このことは、同じ作品が新しい声域において全く異なる響きを持つという新鮮な体験である。少年達に変声後の「自分の声」で歌うことができるように慎重に声の育成がなされる。

ベルリン大聖堂聖歌隊では、このようにして綿密なグループ編成と、それぞれの段階に応じた声の育成が行われている。変声前、変声中、変声後の少年にきめ細やかな対処がなされていることが窺える。変声期間中のグループ名を【未来の声】と名付けているのは、誇りを持って歌っていたに違いないボーイソプラノから、テノール・バスとして、輝かしい未来へ羽ばたいて欲しいという願いが感じられるものである。変声期を迎えた少年たちを祝福し、大切に、暖かく包み込むようにして迎えている様子が伝わってくる。

3.2 テルツ少年合唱団

続いて歴史は浅いが実績を持つテルツ少年合唱団を事例として取り上げる。⁸⁾ テルツ少年合唱団は、1956年にモーツァルト生誕200年を記念して、南ドイツのアルプス山中の温泉地バート・テルツに、ゲルハルト・シュミット・ガーデン氏によって設立された。以来50年間、シュミット・ガーデン氏の指導によって短期間のうちに世界第一級といわれる少年合唱団と呼ばれるようになった。少年合唱独特の清澄さと精緻な力強さを併せ持った表現を特色としている。団員は6歳から音楽教育を受けることができる。変声期の対応については次のように記述されている。

変声差し迫った段階にある間は、どんなことがあっても、強制的に歌うことによって、後々声を傷つけることを生じさせないために、合唱団で歌うことは休まなければならない。テルツ少年合唱団においては、ごく僅かな変声の最少の前兆に際しても、合唱団で歌うことを止めさせなければならない、例え彼が声部のリーダー、または現

在交代ができない存在であったとしても。ところが、少年合唱、児童合唱、そして学校合唱の実践において、この原理は度々破られている。従って、もはや埋め合わせはできないので、計り知れない障害が稀ではなく発生している。どれほど多くの希望に溢れた歌い手が、彼らの職業上の成功を、彼らの声への過大な要求の故に、この時期に放棄せざるを得なかったことか！

一方、変声期にある者にとって、彼が歌を止めるのではなく、彼の声に相応しく用心深く、しかし目標をもって「歌い続ける」ならば、大きな価値を有する。

後期変声期は、3ヶ月から4年間にかけて続くことが有り得る。この時期に変声者は、経験を積んだ声の育成者のもと、用心深く継続して歌うことを求められる、つまり、定期的に少なくとも2週間毎に、彼は自分の新しい声を診断してもらい、そして教師から彼の声にその都度、目下の段階に良い効果を与える練習曲を受け取る。例えば彼の声が、中央の位置において2つの音に属する一つの範囲のみ持ち、そして定められた母音のみ許されるとしても(殆どの場合開いていない)。徐々に信頼できる範囲が再び増大し、主筋肉の膨らます能力と混合する能力が縁の機能と共に強化されるだろう。(Garden, 2006, S.27.)

シュミッターガーデンは変声期間を、前期変声期、変声期、後期変声期という3つの区分で捉えている。変声期が差し迫った段階の間は、歌うことは休まなければならない。この時期に歌うことは後々に禍根を残す。一方、変声期に個人差に合わせ、用心深く目標を持って歌うことは価値を有する。変声後期は3ヶ月から4年間にかけて続きがあり得るが、経験を積んだ育成者のもと用心深く継続して歌い、2週間毎に声の診断を受け、段階に応じた練習曲を受け取るならば歌える範囲が増大する。段階に応じた対応が必要であると述べている。

たらさわ(1986)は、テルツ少年合唱団をモデルとして、合唱団での少年たちの姿を漫画に描いた。その中にボーイソプラノとして活躍していた少年たちが変声期を迎えたときの、シュミッター=ガーデンの対応を見ることができる場面がある。シュミッター=ガーデンの言葉は次のようなものである。

「変声期の少年たちにも練習をすべきです。彼らに適した方法の範囲内で・・・」

「変声期であっても・・・筋肉が使われるということは非常に大切だ」

「使わないでほっておいたのでは、2、3年後には、まったく声をコントロールする事ができなくなってしまう」

「変声期が来たからといって・・・私は彼らから歌を取ったりする事はしません。

彼らの今の声の出る範囲内で歌うことは可能なのです」

「今日、ここに来ているのは、ちょうど、変声期中の、かつての、ソリスト達です」
「たとえば、この歌、さ、歌って」(たらさわ, 1986, pp.16-52.)

この場面からは、少年合唱団でボーイソプラノとして活躍していた少年たちが変声期を迎えたときのシュミット=ガーデンの対応と、少年たちの繊細な心の動きを読み取ることができる。ムタンテン・プローベンを受ける変声期の少年たちは、輝かしいボーイソプラノの時代に別れを告げ、その志を後輩たちに託し、新たな一歩を踏み出すのである。

4. 考察と今後の課題

本稿では、ここまで我が国における変声の捉え方の変遷とドイツの少年合唱団における変声期対応の事例を追ってきた。我が国においては、ここ 100 年余の間に「歌わせない」から「歌わせる」という方向へ変遷してきたと言えよう。ジーベルと福井に共通する、我が国における発声指導初期の「変声期間中は歌ってはいけない」という考え方は、我が国の音楽教育がその規をドイツに求めてきたという歴史を鑑みれば当然のことである。

ベルリン大聖堂聖歌隊とテルツ少年合唱団における「変声期間中は無理をして歌わせず、理論を学んだり鑑賞を楽しんだりして音楽性を高める」という対応は共通しているが、大規模合唱団であればこそ可能な取り組みである。団員数の少ない少年合唱団では歌わせざるを得ないこともあると考えられる。教育課程における音楽科の学習においては、変声期段階が異なる同年齢の児童・生徒が同時に在籍するので、歌わせざるを得ないのである。

事例として取り上げた2つのドイツの少年合唱団は共に、少年と成人男性とでのみ構成される(女声を含まない)混声合唱のグループを持っている。変声期間は男声パートへと進むための貴重な準備期間であり、男声の歌い手として活躍できるまでは、無理をさせずに育成するという方針である。「歌ってはいけない」という主張は、裏を返せば、「変声中は無理をせず、大切にしておいて変声後に再び活躍して欲しい」という、雌伏の時であり、サナギが蝶になるのを待つという考え方であろう。

だが、鎌田(1983)と竹内(2009)の主張は、「変声期間中も、正しい発声法のもとに、無理をさせるのではなく、適切な音域で積極的に歌わせる」という点でほぼ一致している。

岩崎(1997)は、我が国において変声期の指導がこのように意識されてきたのには理由があり、それは日本様式の発声とヨーロッパの発声様式の違いであるとしている。日本様式の発声は、表声(地声)を主体としているので、変声前と変声後の声の出し方に大きな違いはないが、ヨーロッパの発声様式は、変声前は頭声を主に使い、変声中は裏声と地声の両方を使い、変声後は表声(地声)を主に使うので、ヨーロッパの発声様式では次のよ

うなことが言えると記述している。

- ・ 同声から混声へと声域が広がっていくことから、男子の発声は、変声前は頭声を主に使い、変声中は、裏声と地声の両方を使い、変声後は表声（地声）を主に使う。
- ・ ただし変声後でも、ファルセットで歌うと高音も楽に出ることから、男子の多くは、地声とファルセットを使い分けて歌っている。

これらのことから、変声は肉体の自然な発達であるにもかかわらず、男子の場合、歌唱の様式として、同声から混声へ変えていかなければならず、発声も必然的に裏声から表声へ変えていく技術的な課題があるのです。（岩崎、1997, p.76）

岩崎は、変声は特殊なことではないので、裏声から表声への技術的な課題を解決させることを提言している。我が国においては 1955 年のウィーン少年合唱団の初来日以来、男子児童発声指導法の研究が進められてきたが、背景には、我が国と西欧との違いがあることを忘れてはならない。

変声の時期については個人差があり、平均的変声年齢も時代によって推移している。変声期の生徒の心理的な面には繊細なものがある。2017 年 3 月に公示された新学習指導要領（33 年度完全実施）では、「変声期及び変声前後の声の変化について気付かせ、変声期の生徒を含む全ての生徒の心理的な面についても配慮するとともに、適切な声域と音量によって歌わせるようにすること」と改訂されてはいる。「適切な声域」と「適切な音量」によって「歌わせる」という方向である。だが、「適切な声域」といっても既存の教材では対応が難しいため、現在は教材の開発が求められ、進められていると言えよう。

5. 終わりに

2002 年 12 月 25 日の朝日新聞には、「がんばれ『天使の歌声』一解散、衣替え・・・ピンチの少年合唱団」という記事が掲載されている。「少子化で団員集めに苦心、サッカーや塾もライバル」と見出しは続いている。更に、2010 年 2 月 12 日には、同じく朝日新聞に「天使の歌声にも時代の波、厳しさ不人気、志望者激減」という記事が掲載された。⁹⁾ 世界的に有名なウィーン少年合唱団でさえ人材不足に悩んでいるというものである。前者は我が国の少年合唱団の状況を、後者は世界の少年合唱団の状況を伝えるものであるが、共に少年合唱団の運営がいかに大変であるかを物語っている。記事の掲載から 16 年、8 年が経過した現在、状況は益々厳しさを増していると推察される。

本稿においては、少年合唱団運営の難しさの一要因と考えられる変声をとりあげたが、ドイツにおける学校教育の場における変声への取り扱い事例を取り上げることができなかった。今後の課題としたい。更に、少年合唱団運営の難しさの他の要因である、男子児童

の特性からくる、「興味・関心の方向性がスポーツや学業などに向きがちである」や、「親の期待するところが音楽ではない」などの検討についても、合わせて今後の課題としたい。

-
- 1) 少年合唱団として単独で活動を行っている団体。小学校聖歌隊と少年少女合唱団少年の部を除いた次の団体。【Tokyo FM 合唱団、フレーベル少年合唱団、グロリア少年合唱団、新潟少年合唱団、常滑少年合唱団、ボーイズ・エコー・宝塚（休団中）桃太郎少年合唱団、広島少年合唱隊、呉少年合唱団、北九州少年合唱隊】
 - 2) 本稿における「少年合唱」は、男子児童・生徒のみで構成され、女子児童・生徒を含まない合唱を指す。
 - 3) 著者フェルディナント・ジーベル Ferdinand Sieber は唱歌教師。(1822-1895) ウィーン生、ベルリン没。
 - 4) 1927年に訂正4版を発刊。
 - 5) 中野義見(1955)は『教育音楽6月号』特集「少年合唱をめぐって・少年合唱の愉しさと美しさ」に「このように、音楽の世界から男子をシャットアウトして来たのは、一体だれの責任なのであろう。『有髯男子のなすわざに非ず』と蔑み、『婦女子のなすわざ』と方言したのは一体どういうポストを占めている人の言であったろうか」の記事を寄せている。
 - 6) 付属のCDには、「授業で聴かせたい変声の様子」として、「1. 変声期の過程“秋の子”で聴く、2. 移調唱の歌声“犬のおなか”で聴く、3. オクターブ低い歌声の変容“夢をのせて”で聴く、4. 変声の推移“混声合唱”で聴く」という、変声を段階的に追った音声記録が収録されている。
 - 7) 本項における使用文献は Peter Hahn (2004) *Staats- und Domchor Berlin* である。
 - 8) 本項における使用文献は Gerhart Schmit-Gaden (1992) *Wege der Stimmbildung*. である。
 - 9) <http://www.asahi.com/showbiz/music/TKY201002120004.html>

【引用・参考文献】

- Gerhart Schmit-Gaden (1992) *Wege der Stimmbildung*. Frankfurt a. M.: Allegra Musikverlag
- Konrad Küster (1996) *Der junge Bach*: Deutsche Verlags-Anstalt
- Peter Hahn (2004) *Staats- und Domchor Berlin*. Badenweiler: Oase Verlag
- 井上武士 (1949) 『音楽教育精義』教育科学社

-
- 岩崎洋一（1997）『小学生の発声指導を見直す』音楽之友社
- 岩崎洋一（2000）「男子児童発声の系譜—1930年代から1950年代にかけて—、音楽教育学研究1」音楽之友社
- 岩崎洋一（2008）「児童発声の系譜—品川三郎の実践—」福岡教育大学紀要第57号
- 小田野正之（1974）『変声期—歌唱面からみたその実態と指導』教育芸術社
- 加藤友康（1977）『こえの知識：のどを大事にしたくなる本』鳩の森書房
- 鎌田典三郎（1983）『実践に即した歌唱指導の手引き—指導者のための—』自費出版
- 教育史編纂会編（1938）『明治以降教育制度発達史・第4巻』龍吟社
- 教育史編纂会編（1939）『明治以降教育制度発達史・第5巻』龍吟社
- 草川宣雄（1928）『唱歌法及発声法』京文社
- ゲック、マルティン（2001）『ヨーハン・ゼバスティアン・バッハ』第I巻「生涯」小林義武（監修）、鳴海史生（訳）東京書籍
- 品川三郎（1955）『児童発声』音楽之友社
- ジーベル（1930）『ジーベル唱歌法 *Katechismus der Gesangskunst*』東京音楽学校學友會譯、高井樂器店
- 藪田恵一郎（1961）『変声期の研究と歌唱指導』音楽之友社
- 高橋雅子（2011）「合唱活動における変声期に関する研究：Cambiata Conceptを適用して」山口大学教育学部教育論叢
- 高橋 雅子，阿川 祥子，石村 香織（2012）「合唱活動における変声期男子のパート分けに関する研究：Cambiata Conceptの声の分類を適用して」山口大学教育学部附属教育実践研究紀要
- 高橋 雅子，石村 香織，古川 市郎（2013）「合唱活動における変声期男子のパート分けに関する研究（2）Cambiata Conceptが提唱した声の分類の検証」-山口大学教育学部附属教育実践研究紀要
- 高橋 雅子，石村 香織，古川 市郎（2014）「合唱活動における変声期男子のパート分けに関する研究（3）小学校高学年男子にCambiata Conceptの方法論を適用して」-山口大学教育学部附属教育実践研究紀要
- 高橋雅子（2015）「変声期男子が快適に歌える合唱指導法と教材開発に関する研究（1）カンビアータ・コンセプトによるThe Adolescent Reading Singerの分析」山口大学教育学部教育論叢
- 高橋雅子，友清 祐子，川原 真矢，古川 市郎，白地 太，徳田 修二（2015）「合唱活動における変声期男子のパート分けに関する研究（4）Cambiata Conceptの方法論を適用した声域変化の検証」山口大学教育学部附属教育実践研究紀要

-
- 高橋雅子（2016）「変声期男子が快適に歌える合唱指導法と教材開発に関する研究（2）
カンピアータ・コンセプトを適用したパート分け及び声域変化の検証」山口大学教育学部・教育論叢
- 高橋雅子（2018）「変声期男子が快適に歌える合唱指導法と教材開発に関する研究（3）
カンピアータ・コンセプトを適用したパート分け及び声域変化の検証」山口大学教育学部教育論叢
- 高山清司（1958）『変声期の音楽指導』音楽之友社
- 竹内秀男（2009）『変声期と合唱指導のエッセンス—授業で聴かせたい変声の様子—』教育出版
- たらさわみち（1986）『こんにちは天使たち』新書館
- たらさわみち（2003）『バイエルンの天使①』講談社
- たらさわみち（2003）『バイエルンの天使②』講談社
- たらさわみち（2003）『バイエルンの天使③』講談社
- 土田陽子（2015）『男女別学の時代・第4章中学校と高等女学校における音楽教育とジェンダー—音楽教育の位置づけと意義の変容過程』柏書房
- 橋本静一（1990）『声の発見：成長期のヴォイストレーニング』音楽之友社
- 樋口隆一（2008）『バッハの風景』小学館
- 福井直秋（1927）『唱歌の歌ひ方と教へ方、訂正4版』共益商社書店
- 福井直秋伝記刊行会編（1969）『福井直秋伝』福井直秋伝記刊行会
- 文部省（1956）『頭声発声指導の研究—音楽科実験学校の研究報告（2）—』教育出版株式会社
- 森恭子・関綾子（2002）「熊本県内の小・中学生における変声期の歌唱指導に関する実態調査」熊本大学教育実践研究 19 卷
- 山口薫（1967）『発声法とソルフェージュ』全音楽譜出版社
- 「ミュンヒェン・テルツ少年合唱団 1990 年 6 月 14 日日本公演プログラム」（1990）、メルパルクホール福岡
- 「少年合唱団 Boys' Choir — 天使の歌声」（2004）新書館
- 「ライジング・少年合唱団 — 天使たちのコンサート」（1986）新書館
- [A Study on the voice changing in the Boys' Chorus: Through the Cases of Japan and Germany]
- [Inoue, Hiroko、小田原短期大学保育学科通信教育課程特任准教授・音楽教育学]